

初期瑜伽行派 3 文献における samgraha (撰, bsdu pa)

— 『瑜伽師地論』『顕揚聖教論』『阿毘達磨集論』 —

岡田 繁徳

I はじめに

初期瑜伽行派の、いわゆる法相的特徴が顕著な 3 つの文献、*YBh*・『顕揚』・*AS* には、同じ教義概念を扱いながら、類似し、あるいは異なった説明を与える箇所が数多くみられる。こうした記述は、伝統的に、法相に関する典拠として、いわば並列的に利用されてきた。その半面、記述にみられる類似／相違の具体的な様相や、そうした類似／相違をもたらした文献ごとに固有で内在的な根拠の有無の考察、そして何らかの根拠を見出しうるとすればその妥当性の確認は、共通したテーマを扱う記述の多さに比べて、十分に行われてきたとは言い難い。こうした点を検証すること、およびそれを通じてこれら 3 文献の成立史に関わる手がかりを探索することは、3 文献すべての成立への関わりが伝承される瑜伽行派の始祖アサンガが果たした関与の在り方¹を究明するうえで、少なくとも傍証として意義があるものと思われる。

本稿では、その試みとして、これら 3 文献において共通して扱われる教義概念の整理手法のひとつ、包摂〔関係〕(samgraha, (相)撰, bsdu pa/bsdus pa. 以下では煩雑を避けるため、主として漢訳「撰」により参照)を取り上げる。一見して類似していることが自明に思われるこれら各書・各所の記述は、仔細に比較対照した場合、果たしてどのように、またどの程度、類似あるいは相違しているのだろうか。そして、そのような比較対照を通じて得られた結果から、これら 3 文献について、その成立の先後関係やテキストごとに固有の思想的な重点や傾向といった、文献史・思想史的特徴を見出すことは可能だろうか。

本稿は、こうした問を念頭に置いて、まず II 「『撰』言及の文脈」で、「撰」に関する記述が、対象テキストごとに固有の文脈に置かれており、その位置付けがそれぞれ異なっていることを確認する。次いで III 「考察」で、テキストにより総数も異なるこれら「撰」を一括りに纏めて、形式・内容の両面から各所の記述の異同を検討した場合に導かれる、いくつかの考察結果を示す。そのうえで、実質的に同じ 11 種類の「撰」が、ひとまとまりのものとしてこれら対象テキストのすべてにおいて説かれていることを明らかにする。さらに、IV 「結論」で、II・III で指摘した、同じ一群の「撰」が異なった言及の様相を呈していることの、文献史的・思想史的な意義を考察し、*YBh* および『顕揚』が成立した後に *AS* が著されたとする、これら 3 文献成立の先後関係に関する作業仮説の妥当性を論じる。

参考のため、本稿で扱う「撰」を表形式にまとめた「『撰 (samgraha)』対照表」(以下、「表」)を末尾に示す。

¹ これら 3 文献の成立に関する伝承とその解釈をめぐる研究史については、たとえば Schmithausen (1987) Part I, pp.183–193 (Supplement I: *Reconsideration of some aspects of the methodology of exploring the history of early Yogācāra literature*) を参照されたい。本稿では、*AS* をアサンガの著作とみなすこと、および *YBh* は『顕揚』に先立って成立していたとすることの 2 点を、最小限の前提とする。

II 「撰」言及の文脈

まず、「撰」言及の文脈をテキストごとに検討する。

II-1 *YBh* 本地分・『顕揚』撰事品

「撰」の名称のみを列挙する *YBh* 本地分と『顕揚』撰事品の、本稿検討箇所とその前後にある記述は、ほぼ逐語的に同じである。相違点は、以下に掲げる嚙挖南（主題要約の偈頌）4 偈を、1 偈ずつ分割して長行を挟むか（*YBh* 本地分）、4 偈をまとめて先に示した後に長行を連ねるか（『顕揚』撰事品）の違いのみである（下線部は「撰」に関わる箇所を示す）。

句迷惑戲論	住眞實淨妙	寂靜性道理	假施設現觀
方所位分別	作執持増減	冥言所覺上	遠離轉藏護
思擇與現行	睡眠及相屬	<u>諸相攝相應</u>	說任持次第
所作及所縁	亦瑜伽止觀	作意與教授	徳菩提聖教

〔*YBh* 本地分（各偈 1 行ずつ、順に）Ch345a2-3; 346a7-8; 346a25-26; 346c17-18.

および『顕揚』撰事品 Ch500b1-8²〕

gnas dang 'khrul dang spros pa dang/ rab zhi rang bzhin rigs pa dang/ yul can gnas skabs rtog pa dang/ tshigs dang rtogs bya yang dag phul/ rnam par 'byed dang kun du 'byung/ <u>bsdu</u> dang mtshungs par ldan pa dang/ bya ba dmigs pa spyo rab dang/ yid la byed dang gdams dag dang/	gnas pa de nyid dge (P: dag) dang mchog/ brda dang mngon par rtogs pa'o/ sgyod len tshogs dang mun pa dang/ dpen pa dang ni 'jug pa bzhi/ nyal ba dngang ni 'brel pa dang/ bsnyad dang ston pa go rim (D: rims) mams/ zhi gnas dang ni lhag mthong dang/ yon tan byang chub bstan pa yin/
---	--

〔*YBh* 本地分（各偈 2 行ずつ、順に）Tib D161a7-8, P184b5-6; D163a3-4, P186a6-7; D163b1-2, P186b4-5; D165a2-3, O188b2-4〕

この 2 カ所に関しては、先行研究への参照も含め、すでに早島理・毛利俊英による優れた論考³がある。とくに同論文「三（II）」節（pp.69-75）では、まさにこれらの箇所が詳しく比較考証され、両テキスト間の密接な関連性が指摘されている。委細は同論文を参照されたい。

² ここでは *YBh* 本地分の漢訳を示した。『顕揚』撰事品との異同は、*YBh* 本地分：『顕揚』撰事品の順で、以下のとおり：引用した第 2 偈の第 3 句「冥」「闇」；同「言」：「語」；第 3 偈第 1 句「思擇」：「思擇」；第 4 偈第 1-2 句「所作及所縁 亦瑜伽止觀」：「所作境瑜伽 奢摩他與觀」；第 4 偈第 3 句「作意與教授」：「諸作意教授」。

紙幅の制約から、和訳をすべて割愛するが、これら 4 偈で列挙されているのは、漢訳で示せば以下の 45 種である（（ ）内は『顕揚』撰事品での表記）：「句」「迷惑」「戲論」「住」「眞實」「眞實」「妙」「寂靜」「性」「道理」「假施設」「現觀」「方所」「位」「分別」「作」「執持」「増」「減」「冥（闇）」「言（語）」「所覺」「上」「遠離」「転」「藏護」「思擇（簡択）」「現行」「睡眠」「相屬」「諸相撰」「相應」「說」「任持」「次第」「所作」「所縁（境）」「瑜伽」「止（奢摩他）」「觀」「作意（諸作意）」「教授」「徳」「菩提」「聖教」。

³ 早島理・毛利俊英（1990）pp.51-88.

本稿の主題である「撰」は、YBh 本地分と『顕揚』撰事品とのいずれに於いても、上掲の嚙陀南4偈のうち第3偈第3句、およびその内容を列挙する長行⁴に「諸相攝 bsdu」(上掲の下線部。但し YBh 本地分の漢訳長行のみ「撰」(チベット訳は bsdu pa)として挙げられている。

本稿では、これら4偈は、YBh 本地分では、五明処のうち内明処の、4つの観点⁵による規定のうち第1「事〔=仏典〕設定の規定(事想施設建立相, gzhi gdags pa nam par gzhas pa)」に次ぐ第2「概念分類設定の規定(想差別施設建立相, ming rab tu dbye pa gdags pa nam par gzhas pa)」のなかで、また『顕揚』撰事品では、同じく「事」「想」とまとめて説かれる2種のまとめ「一切佛語言事攝」「一切佛語言想攝」のうちの後者「仏の言葉の一切を概念によってまとめること」において、いずれも一括して扱われていること、さらに、「撰」に関する長行では、YBh 本地分が「界」から「勝義」までの10種と「蘊」「界」「処」「縁起」「処非処」「根」の6種の計16種「撰」(「表」第1列を参照)を挙げるのに対して、『顕揚』撰事品は「更互」から「勝義」までの11種(「表」第3列)を挙げていること、以上2点を確認しておく。

II-2 『顕揚』成善巧品

『顕揚』成善巧品では、蘊・界・処・縁起・処非処・根の6者に諦を加えた計7種の善巧について詳説した後、第25偈およびそれに対する長行で「善巧には別に23種の分類もある」と述べ、それらを列挙する。

この箇所では23種の筆頭に挙げられる「異撰論善巧」は、さらに「種種撰善巧」「種種論善巧」の2つに細分されるが、そのうちの前者で、「界」から「更互」までの11種「撰」(「表」第4列)が定義を与えられる。関連する箇所を抜粋して挙げる((I),(1-1)などは、内容整理のために引用者が付した)。

〔『顕揚』成善巧品 Ch547a25-b8〕 頌曰。

當知諸善巧 差別二十三

異攝論爲先 後最極清淨

論曰。應知、蘊等善巧差別、復有二十三種。謂 (1) 異攝論善巧。…〔中略〕… (23) 最極清淨智善巧。…〔後略〕…

〔同上 Ch547b9-b22〕 此中、(1) 異攝論善巧、復有二種。一 (1-1) 種種攝善巧。二 (1-2) 種種論善巧。(1-1) 種種攝善巧者、有十一種。所謂界攝、乃至更互攝。

II-3 YBh 撰決択分

YBh 撰決択分では、「蘊・界・処・縁起・処非処・根」の六種善巧で通曉すべき対象の各々についての議論のなかで、「撰」がとりあげられる。具体的には、これら六種善巧はただい

⁴ YBh 本地分 Ch346b27; Tib D164b27, P188a1. および『顕揚』撰事品 Ch501b5-6.

⁵ YBh 本地分 Ch345a24-25; Tib D161a4-5, P184a3-5. ここで直後に示した2つの観点に加えて、第3「由攝聖教義相 bstan pa'i don bsdu pa」〔教法の意味〕、および第4「由佛教所應知處相 sang rgyas kyi bka'i shes bya'i gnas」〔仏のお言葉の知られるべきところ〕を挙げる。

ま掲げた順序で、複数の観点から定義されるが、「撰」は、以下の嚩唵南で示される、蘊善巧に関する 6 つの観点のうちの 5 番目である。

如是已説六種善巧。謂蘊善巧、乃至根善巧。云何應知、是諸善巧廣建立義。復次、嚩唵南曰。

自性義差別 次第攝依止 〔YBh 撰決撰分 Ch593b6-9〕

mkhas pa drug po 'di lta ste/ phung po la mkhas pa nas dbang po la mkhas pa'i bar du gang
gsungs pa'i mkhas pa de dag gi mam par gzhag pa ji lta bu yin par rig par bya zhe na/ sdom ni/
ngo bo nyid dang don mam (D: mams) dbye/ go rim (D: rims) dang ni bsdu dang brten/

〔和訳：6 つの善巧とはすなわち、蘊善巧から根善巧にいたるまでのものであると〔世尊が〕お説きになった、これら〔蘊・界・処・縁起（縁生）・処非処・根に関する 6 種の〕善巧は、どのようにして規定されるべきか。〔これについて〕主題要約の偈頌に曰く、

自性と意味と分類と、順序と包撰〔関係〕と依止と

〔YBh 撰決撰分 Tib D37b4-5, P40a1-2〕

「更互撰」を除く「界撰」から「勝義撰」までの 10 種「撰」の具体的な定義は、その直前に置かれた、六種善巧の対象である蘊・界・処・縁起・処非処・根の 6 つ相互の包撰関係の説明に続いて与えられる（「表」第 2 列）。但し、これら 10 種「撰」の扱いは、先行する「更互撰」相当箇所、いわば“別説”（「復有」（Ch596c1）、gzhag yang (Tib D46b5, P49a5)）である。

さらにそこでは、「勝義撰」までの 10 種「撰」を説明し終えた後に、以下の一節が付け加えられている：

(1) 如是諸蘊一切攝義、總有十六。如蘊、乃至根亦爾。

(2) 又由三法、攝一切法。謂色蘊、法界、意處。 〔YBh 撰決撰分 Ch596c11-13〕

(1) de dag thams cad gcig tu bsdus na/ phung po mams kyi bsdus pa bcu drug yod de/ phung po mams la ji lta ba bzhin du dbang po mams kyi bar la yang de bzhin no/

(2) gzhag yang chos gsum gyis chos thams cad bsdus pa yin te/ gzugs kyi phung po dang/ chos kyi khams dang/ yid kyi skye mchad kyis so/

〔和訳：(1) それら〔＝「撰」〕すべてをひとつにまとめるならば、諸蘊の包撰関係は 16 種あるのであって、諸蘊の場合と同様に、〔界・処・縁起・処非処・〕根に至るまでも、また同様〔に 16 種の「撰」があるの〕である。

(2) さらにまた、3 つの法によって一切法が包撰されるのであって、〔その 3 つの法とは〕色蘊・法界・意処である⁷。〕 〔YBh 撰決撰分 Tib D47a3-5, P49b5-7〕

⁶ 以下で示す YBh の記述は、この嚩唵南が挙げる 6 つの観点が六種善巧のすべてに適用されるように読める。しかし、実際にはこの嚩唵南は蘊善巧のみを対象としたもので、残る 5 種の善巧についても、それぞれ個別の観点から議論されている。

⁷ これと全く同じ、色蘊・法界・意処の 3 つによって一切法が包撰されるという趣旨の記述は、たとえば AS 本事分三法品 (Ch666b13; Tib D54b2-3, P63a3-4。また ASVj Ch702c21-23; Tib D137b7-138a1, P167b1-2) の十二処の定義に於いても見られる：「由此道理、諸蘊界處三法所攝。謂色蘊、法界、意處」。但し、この漢

上掲 (1)(2) の2文のうち、(1) がいう16種の「撰」は、数の点からは *YBh* 本地分が名称のみ列挙するものと同じであるが、それを指すかは、詳しい説明を欠くため、確定できない。(2) については、文頭の接続辞が漢訳では「又」で明確ではないが、チベット訳 *gzhan yang* からは、この (2) を「撰」に関するさらなる別説と解釈することも可能か。

II-4 AS本事分

AS 本事分において、「撰」は、同書第1章で扱われる12の論題のうち、10番目に位置し、「相」から「勝義」までの11種(「表」第5列)を説く。

これに先立つ第1「幾(kati)」(=蘊・界・処の数)から第9「広分別(prabheda)」(=詳細な分類)までの論題が、漢訳でいう「三法品」であり、ここでは(五)蘊・(十八)界・(十二)処という3つの教義概念の各々が、主として個別に、かつ網羅的に論じられる。

AS 全体冒頭の嚧陀南⁸に列挙される、この漢訳「三法品」相当部分の9つの論題と、第10「撰(samgraha)」・第11「(相) 応(samprayoga)」・第12「成(就)(samanvāgama)」⁹とを合わせた4つ(の「品」(漢訳))は、漢訳が「本事分」として一つに括るものである。「撰」は、AS に於いては、その他3つの「品」と並記するに足る、独立した論題として意識されあるいは意図されていた、とみなすことができよう。

訳は、単に「蘊界処は(総体として)色蘊・法界・意処の3つの法から成る」として包摂関係を示す語を出さない以下のチベット訳と比べると、意識の感が強い: *de nyid kyi phyir phung po dang/ khams dang skye mched mams ni chos gsum du 'gyur te/ gzugs kyi phung po dang/ chos kyi khams dang/ yid kyi skye mched to/*
 なお、『俱舍論』I-18 および自注は、*YBh* 撰決択分のこの箇所とほぼ全同。

⁸ AS Skt 阿毘達磨集論研究会(2015) p.59 : *kati kasmād upādānam lakṣaṇam tadvyavasthitiḥ/ kramārthapūnyabhedaś ca samgrahādi catuṣṭayaṃ/ samgrahaḥ samprayogaś ca samanvāgama eva ca/ viniścayaś caturbhedaḥ piṇḍoddānaṃ samuccaye/ satyadharmāptiśāṃkathyavinīścaya-vibhedataḥ/* [和訳:(1) 蘊・界・処は) 幾つあり、(2) 何に基づいて(そのように数を規定するか)、(3) 取(と蘊・界・処)、(4) 蘊・界・処の特徴、(5) それら(蘊・界・処)の定義、(6) 蘊・界・処の排列順序、(7) 蘊・界・処の語義、(8) (五蘊)の比喩、(9) 蘊・界・処の分類、および(10)「撰」などの4つ、(すなわち) (10)「撰」(11)「相応」および(12)「成就」と(の以上12の論題が第1章で扱われ、さらに残り4章を構成する)4種の決択と、(これらを合わせたものが)(本書『阿毘達磨集論』の全体の項目要約の偈頌であって、(4種の決択とは)(四)諦・教法・得・論議の区分に基づく)、これに対応する漢訳・チベット訳は、AS Ch663a8-11; Tib D44b1-3, P51a4-5、および ASv Ch695a1-4; Tib D118b1-2, P145a1-2。

⁹ なお、AS 本事分の第10-11論題「撰」・「相応」は、本稿 I-1 でふれた *YBh* 本地分聞所成地・『顯揚』撰事品の嚧陀南4偈および関連する長行においても、連続してこの順序で挙げられている。そこで挙げられる5種は、AS で説かれる6種の最後「同行相応」とほぼバラレル。

「撰」・「相応」を対としてまとめて論じる記述は、*YBh* 撰決択分五識身相応地意地 (Ch608c27-609a2; Tib D76b6-77a1, P80a7-8) にもみられる。そこでは、「撰」を自性 [=包摂関係にあるもの自体の性質/特徴] に基づく包摂(自性所撰非他性, *ngo bo nyid kyis bsdus*)、「相応」を他の事物との結び付き(他性所相応非自性, *gzhan gyis dngo bo dang mtshungs par ldan*)と定義する。「撰」に関するかぎり、*YBh* のこの記述は『俱舍論』I-18 とほぼ同じ。さらに「撰」は自性と他性とのいずれに基づくのか、という類似の議論は、随眠に関する記述ではあるものの、『阿毘達磨大毘婆沙論』大正 No.1545 (Vol.27) 306b10 以下でも行われている。

他方、AS がこれら2つに続けて第12論題として論じる「成就」は、*YBh* 本地分聞所成地・『顯揚』撰事品の上掲箇所では言及されていない。但し、『雜集』決択分 (ASv Ch768c10-11, 768c29-769a5, 770a25-b17.) に漢訳でのみ伝わる箇所では、「撰」・「相応」に加えて「成就」も、この順序で挙げられている。

この「撰」と対にな(りう)る「相応」(また、「撰」・「相応」・「成就」の三つ組)については、別稿を期す。

II-5 『雑集』決択分

最後に、『雑集』決択分での「界」から「勝義」までの11種の「撰」（「表」第6列）に関する記述は、AS本論の4つの決択の最後、決択分論品（*sāṃkathyaviniścaya*、論議に関する決択）を構成する7つの決択のうち、第4「等論決択（*sampraśnaviniścaya*、正しい質問〔の仕方〕に関する決択）」の中に見出される。この一節は、ASVy漢訳に伝わるのみで、ASVyチベット訳・ASBh梵文と同チベット訳には漢訳に相当する部分はなく、さらにAS本論にも、ASVy漢訳のこの箇所の内容に直接関係する記述はない。梵文（およびそれを想定できるチベット訳）が確認できないため、ここで「撰」とされるものの原語が *saṃgraha* であるかは、厳密に言えば未詳とすべきだが、内容からみて教義概念の整理手法としての *saṃgraha* を扱っていることは明らかである。

この箇所の直前で、AS本論¹⁰は、「等論決択」を各々8つの疑問詞（*kapadesa*, *ci zhes bstan pa*、何詞）と関係詞（*yapadesa*, *gang zhes bstan pa*、若詞）とによる問の立て方として規定した後、続けて4つの「決択の道（*vinīścayamārga*, *mam nges kyi lam*、等論決択道理）」を説く。4つの道とは、「〔敵者の見解を〕否定する〔道〕（*dūṣaka*, *sun 'dyin par byed pa*、能破）」「〔正しい自説を〕立証〔する道〕（*sādhaka*, *sgrub par byed pa*、能立）」「〔敵者の疑問を〕切除〔する道〕（*cchedaka*, *gcod par byed pa*、能断）」「〔意味に関して迷妄に陥った人を〕覚知〔させる道〕（*bodhaka*, *khong du chud par byed pa*、能覚）」である。ASの記述が極めて簡潔なためか、ASBhでは詳しく注釈している¹¹。

「撰」に関する記述を含む『雑集』独自の記述（Ch768c6-770c26）は、この直後に「復有」として始まり、各々6つの項目を1群とする5つの群（「自性」「所依」「識」「清浄」「方便」）から成る、別種の「決択の道」を規定する。冒頭に嚙陀南（Ch768c7-8）を掲げ、大正蔵で2頁強を占めるまとまった分量をもつ。嚙陀南に続く内容は大別して3つに分けられる：まず各群の項目名を列挙し（Ch768c9-15）、次いで各々の項目ごとにさらに細項目の名称を列挙し（Ch768c16-769b13）、最後に細項目ごとに定義を与える（Ch769b22-770c26）。「撰」は、5つの項目群のうち「所依」から始まる第2群（「所依」「依」「撰」「相応」「成就」「雑染」）の3番目に位置付けられている。「撰」には11種あることが示され（Ch768c29-769a2）、各「撰」の定義が与えられる（Ch770a25-b6）。

以上から、「撰」への言及は、ほぼ逐語的にパラレルなYBh本地分と『顕揚』撰事品とを含め、本稿で扱う3文献6カ所の各々において固有の文脈に位置付けられていることを確認した。

III 考察

III-1 「撰」の数

本稿が取り上げた考察対象箇所6カ所では、明示的に「撰」として列挙される項目数が異なっている。最多はYBh本地分の16種で、「界」「相」「種類」「分位」「不相離」「時」「方」

¹⁰ AS Ch693b4-6; Tib D118a2-4, P139a4-6, および ASVy Ch768b12-c5; Tib D286a3-b4, P353a5-354a1.

¹¹ ASBh Skt Tatia (1976) §201A-201B, pp.149-150; Tib D111a6-112a1, P136b7-137b2, および ASVy Ch768b12-c5; Tib D286a3-b4, P353a5-354a1.

「一分」「具分」「勝義」までの10の「撰」に、「蘊」から「根」に至るいわゆる六種善巧の6つの「撰」が加えられている。最も少ないのは、*YBh* 撰決択分の10種である。但し、本稿I-3で前述したように、*YBh* 本地分と同じ「界」から「勝義」までの10種「撰」を詳説するこの箇所直前には、六種善巧の対象6者間相互の包撰関係を説明した記述が置かれている。*YBh* 以外の『顕揚』・*AS*の4カ所では、これも同じく「界」から「勝義」までの10に「更互」を加えた、計11種を数える。

このように、10種・11種・16種とテキスト各箇所異なる数の「撰」は、内容面をも考慮すれば、共通する11種が実質的には説かれているとみなしうる。ここでいう11種とは、6カ所すべてで言及される「界」「相」「種類」「分位」「不相離」「時」「方」「一分」「具分」「勝義」の10種「撰」(「表」第1-4列それぞれの第2-11行、および第5・第6列の第2-9行と第11行)に「更互撰」を加えたもの(すなわち『顕揚』・*AS*の4カ所が挙げるもの)である。この仮説の成否を考えるには、*YBh* 本地分・撰決択分の2カ所(但し、本地分は名称列挙のみ)で説かれる六種善巧の対象に関する記述¹²が、『顕揚』・*AS*での「更互撰」の内容と同等であるか否かを確認する必要がある。

まず、名称列挙のみの*YBh* 本地分と、包撰関係を個々に具体的に記述する*YBh* 撰決択分とは、六種善巧で通曉すべき対象である同じ6つを「撰」として扱っている。*YBh* 本地分では、蘊・界・処・縁起 (rten cing 'brel bar 'byung ba)・処非処 (gnas dang gnas ma yin pa)・根 (dbang po) という6種による「撰」を、「界」から「勝義」にいたる10種の後に、続けて列挙する。これに対して*YBh* 撰決択分では、これら10種「撰」を定義する直前の箇所に於いて、*YBh* 本地分では第4項目「縁起」とされたものの表現が「有支 (srid pa'i yan lag)」に変わる以外は同じ6種を、*YBh* 本地分と同じ順序で示し、これら6種間の包撰を詳説している。*YBh* 撰決択分のこの箇所の記述は、明示的に*YBh* 本地分を指示することはないものの、*YBh* 本地分が列挙する「界撰」から「根撰」まで6種「撰」の、いわば具体的な定義といえる。

次いで、「更互撰」の定義は、この「撰」を最も詳しく記述する*AS* 本事分に基づけば、蘊・界・処の異種間における包撰関係であること、および包撰対象の数を具体的に規定すること、以上2点を要件としている¹³。*YBh* 撰決択分では、これら2要件の1点目を採らず、たとえ

¹² *YBh* 本地分: Ch346b29-c2; Tib D164b3-4, P188a2-3; *YBh* 撰決択分: Ch596b16-29; Tib D46a6-b5, P48b7-49a7.

¹³ *AS* Skt Li (2013) p.245 ll.5-28; Ch673a11-25; Tib D70b7-71b4, P83b2-84a8, *ASV* Tib D175a6-176a3, P210a6-211a6, および *ASBh* Skt Tatia (1976) §50 (1) (x), p.47 ll.26-28; Ch717c25-27; *ASBh* Tib D34a3-4, P43a1-3, *ASV* Tib D176a1-3, P211a4-6.

当該箇所の記述は定型であるため、冒頭部分のみを梵文で例示する: itaretarasamgrahaḥ katamaḥ/ rūpaskandhaḥ katibhir dhātubhiḥ katibhir āyatanaiḥ samgrhītāḥ/ daśabhir dhātubhir daśabhir āyatanair ekasya dhātuāyatanasyaikadeśena// [和訳: [蘊・界・処] 相互の包撰関係とは、どのようなものか。[まず、五蘊のうち] 色蘊は、幾つの界・幾つの処によって包撰されるか。10の界・10の処・1つの界と処との一部によって [包撰される]]。本稿本文中でこの「撰」定義の第1の要件として述べたように、ここで鍵となる文言は数疑問詞 *kaṭi* である。

第2の要件とした、蘊・界・処の異種間相互の包撰関係については、この箇所に対する *ASBh* の以下の記述を参考にしてはいる: itaretarasamgrahaṇa skandhāḥ pratyekaṃ dhātubhir āyatanaiś ca samgrhītāḥ yathāyogam evaṃ dhātavaḥ skandhāyatanair āyatanāni skandhadhātubhiḥ samgrhītāni [iti] vistareṇāvagantavyam// [和訳: [蘊・界・処] 相互の包撰 [関係] により、蘊はそれぞれ界と処とによって包撰され、同様に適宜、界は蘊と処とによって、処は蘊と界とによって包撰される、云々と詳細に理解されるべきである]

ば或る蘊が、同じ五蘊に属する他の幾つの蘊によって包摂されるかを説いている。しかし、包摂対象の数を具体的に規定するという上述の要件 2 点目については、AS 本事分と同様である。

以上から、六種善巧の前半 3 種「蘊摂」「界摂」「処摂」に含まれる、蘊・界・処相互の包摂関係への言及を媒介とし、内容面での共通性を加味すれば、YBh 本地分および YBh 摂決分のこれら 2 カ所に於いても、実質的に「更互摂」が言及されていると考えることが可能である。

III-2 排列順

上述 III-1 でみたように、実質的には共通する 11 種が説かれる「摂」は、排列順にも異同がある（「表」参照）。あくまで仮定として、（「表」で示したように）YBh 本地分を基準とした場合、排列順という純粋に形式的な面から、以下の特徴を挙げることができる。

まず、「界」「相」「種類」「分位」「不相離」「時」「方」の 7 種の「摂」は、（「界」と「相」、および「時」と「方」がそれぞれ逆転している）AS 本事分を除く 5 カ所で、同一のこの順序で排列されている。

次に、第 8 「一分摂」と第 9 「具分摂」とを一对とみた場合、同一テキスト内では、先行箇所での排列順と、後出箇所での排列順が逆転している。

第三に、同じく本稿 III-1 で述べたように、「更互摂」に相当する記述が、六種善巧の対象のうちの蘊・界・処と関連付けられるかたちで YBh にもみられると仮定した場合、「勝義摂」と「更互摂」（基準と見なした YBh 本地分で、第 10 「勝義摂」に続く位置にあるため、仮に第 11 とする）の排列順は、（仮に基準とした YBh 本地分と）『顕揚』成善巧品を除いた他の 4 カ所で逆転しているとみなしうる（表下段「備考」欄にも略述）。この逆転には二様ある。ひとつは、YBh 決分と『顕揚』撰事にみられ、「勝義摂」と「更互摂」とが分離しており、「更互摂」がすべての「摂」の筆頭に、「勝義摂」が末尾に置かれる。他方、AS 本事分・『雑集』決分では、これら 2 つの「摂」は（YBh 本地分・『顕揚』成善巧品と同様に、但し逆転した順で）連続して説かれる。

第四に、上述第三の場合と同様に、本稿の考察対象 6 カ所すべてに於いて「更互摂」が事実上言及されていると仮定し、かつ、排列順の逆転がみられる「摂」2 つずつ合計 4 対（「界」と「相」、「時」と「方」、「一分」と「具分」、「勝義」と「更互」）をそれぞれ仮想的な“組”（ここで仮に各々の“組”を順に A・C・D・E とする）とみなし、さらに、残った「種類」「分位」「不相離」の 3 つの「摂」をもまた“組”（仮に B とする）とすれば、“組”レベルでみた排列順は、これら 6 カ所でいずれも ABCDE の順に配列されており、すべて同じであると解釈することも可能である。このことは、上述の第一から第三の諸点のような細部の排列順の相違の理由は未詳であるものの、大まかな排列順には共通する面があることを示唆すると考えられよう。

III-3 用語・用字の異同

さらに、各「撰」の名称の相違は、それぞれの定義内容の決定的な違いを反映した結果ではない。いずれの「撰」でも、その「撰」の呼称(=梵文原語)が異なっているか、あるいは、同一の梵文原語を異なる訳語で表したかのどちらかであると推定できる。

本稿の検討箇所6カ所すべてに存在する漢訳に、純粹に用字の点からみて違いがある「撰」は、以下の3つである：(1)「不相離撰」(*YBh*の2カ所と『顕揚』の2カ所)に対する「伴撰」(*AS*本事分)と「助伴撰」(『雑集』決択分)；(2)「一分撰」(*YBh*本地分・『顕揚』の2カ所・*AS*本事分および『雑集』決択分)に対する「少分撰」(*YBh*撰決択分)；(3)「具分撰」(*YBh*本地分・*AS*本事分および『雑集』決択分)に対する「全撰」(*YBh*撰決択分・『顕揚』成善巧品)と「全分撰」(『顕揚』撰事品)。

これら3つのうち、まず(1)「不相離撰」は、主としてチベット訳の相違¹⁴から、*YBh*(および『顕揚』)と*AS*(および*ASBh*)とは、おそらく梵文原語を異にしているのではないかと考えられる。

次いで(2)「一分撰」は、チベット訳の異同が極めて限定的であること、意味的に梵文原語とチベット訳・漢訳とのあいだに齟齬がないこと¹⁵から、これらは同じ原語に対する翻訳上の相違とみなすことができよう。

部分と全体との対照で、この「一分撰」と対をなすと考えられる(3)「具分撰」(という*AS*漢訳よりも、むしろ*YBh*撰決択分・『顕揚』が言う「全(分)撰」)もまた、チベット訳での顕著な類似¹⁶から、いずれも*AS*本事分の梵語 *sakala-samgraha* を原語として想定し、漢訳の異同は翻訳上の相違と考えて問題ないものと思われる。

以上、主として形式面に関する考察から、「界撰」から「勝義撰」までの10種に「更互撰」を加えた11の「撰」が、様々な異同を示しつつも、ひとまとまりのいわば熟したかたちで、*YBh*・『顕揚』・*AS*の3文献にわたって共通して説かれていることが確認できた。

III-4 内容面の比較

続いて、「撰」名称の列挙にとどまらず各々に定義を与えている、*YBh*撰決択分・『顕揚』成善巧品・*AS*本事分・『雑集』決択分、以上4カ所の、記述内容の異同に関しては、概略、以下の点を指摘できる。

¹⁴ *YBh* 本地分 (Tib D164b3, P188a2) : *tha mi dad par bsdu pa* ; 同撰決択分 (Tib D46b7, P49b2) : *tha mi dad pas bsdus pa* に対して、*AS*での梵文原語 *sahāyasamgraha* (*AS Skt Li* (2013) p.244.1.31) に対するチベット訳 (Tib D70b4, P83a4, *ASV* Tib D174b3, P209b3) は *grogs kyis bsdus pa*。

¹⁵ *YBh* 本地分 (Tib D164b3, P188a2) : *phyogs gcig bsdu pa* ; 同撰決択分 (Tib D47a3, P49b4) : *phyogs gcig gis bsdus pa* に対して、*AS*での梵文原語 *ekadeśasamgraha* (*AS Skt Li* (2013) p.245.1.1) に対するチベット訳 (Tib D70b6, P83a7, *ASV* Tib D174b8, P209b8) は *phyogs gcig gis bsdus pa* で、いずれも*AS*に出る梵文原語の直訳といえる。

¹⁶ *YBh* 本地分 (Tib D164b3, P188a2) : *mtha' dag bsdu pa* ; 同撰決択分 (Tib D47a2, P49b4) : *mtha' dag gis bsdus pa* に対して、*AS*での梵文原語 *sakalasamgraha* (*AS Skt Li* (2013) p.245.1.3) に対するチベット訳 (Tib D70b7, P83b1, *ASV* Tib D175a3, P210a4) は、*YBh*撰決択分のものと同じ *mtha' dag gis bsdus pa*。

II-4-1 YBh 撰決択分と『顕揚』成善巧品

まず、YBh 撰決択分と『顕揚』成善巧品の記述は、11種の「撰」のほとんどで、ほぼ逐語的に同じである。この2カ所のあいだで例外的に若干の違いがみられるのは、「不相離撰」および「更互撰」の2つである。「不相離撰」については、関連箇所テキストと和訳を以下に示す：

不相離攝者、謂諸蘊等、由一¹⁷法、攝一切蘊等。以彼眷屬不相離故。

〔和訳：「不相離撰」とは、蘊〔・界・処〕が、単一の法〔=たとえば五蘊の一つとしての色蘊（に属する色法を考える場合、その在り方）のゆえに、〔換言すれば〕それ〔=たとえば色蘊〕と〔それに〕眷属するものとは相互に不可分である〔という在り方〕から、〔5つの〕蘊すべてによって包撰され（てい）る〕〔『顕揚』成善巧品 Ch547b15-16〕

（五）不相離攝。謂諸蘊等、由一一法及諸助伴、攝一切蘊等¹⁸。

〔和訳：（第五の撰たる）「不相離撰」とは、蘊〔・界・処〕が、〔たとえば蘊であれば、その蘊に属する〕個別の法とそれを取り巻くものによって〔一体を成すものとして包撰され（てい）る〕から、〔蘊であれば、その蘊自体を含む5つ〕すべての蘊〔・界・処〕によって包撰される¹⁹〕
〔YBh 撰決択分 Ch596c5-6〕

tha mi dad pas bsdus pa ni phung po la sogs pa de dag nyid kyi chos re re la yang phung po la sogs pa 'khor dang bcas pa thams cad kyi bsdus pa gang yin pa'o/

〔和訳：「不相離撰」とは、蘊などが、それら自体〔に属する〕法のそれぞれについても、取り巻くものを伴った蘊などすべてによって包撰されているものである〕

〔YBh 撰決択分 Tib D46b7-47a1, P49b2〕

2点めの「更互撰」に関しては、YBh 撰決択分ではこの「撰」の名称を陽に挙げないが、内容的にこれに相当するとみなしうる、六種善巧の対象としての蘊などに関するまとまった分量の記述があることは、先に本稿 II-3 および III-1 で指摘したとおりである。これに対して『顕揚』成善巧品 (Ch547b21-22) では、「更互撰」とは、蘊〔・界・処〕などが、互いに包撰する〔関係〕をいう（「更互攝者、謂諸蘊等、更互相攝」）という簡潔な定義が与えられるのみである。

¹⁷ 「由一法」の部分には、大正蔵注記によれば、たとえば YBh 撰決択分の対応箇所漢訳から想定可能な「由一法」などの異読はない。

¹⁸ 本稿が扱った箇所の漢訳における包撰関係の表現には、主として二様ある。一方は、「A……B所撰」のかたちで「包撰される対象 A は、包撰する主体 B に包撰される」とするもの。これに対して、この箇所にもみられるように、『顕揚』成善巧品および YBh 撰決択分では、「A……撰 B」いう表現も用いられる。この形式をとる漢訳に対応する梵文・チベット訳では、B を具格・具格相当の助辞によって表して包撰主体として明示するので、A が包撰される対象であることが確定する。そこで、梵文・蔵訳と齟齬を来さないように「A……撰 B」式の漢訳を解釈しようとするれば、「A は B に撰す」と読み下し、「B のうちに A が包撰される」ことを言い表しているとして解釈するほかない。

¹⁹ 前注 18 と関連するが、和訳がここに示したような冗長なものになっている理由は、この箇所における漢訳の表現は、相当に補足しないと的確に理解できないと考えたためである。漢訳の解釈を理解を難しくしている原因は、包撰主体と包撰対象との二項関係とみなしうる包撰に、「由」で始まる、第三の（いわば）媒介項が言及されていることである。

III-4-2 YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品と AS

次に、これら YBh 撰決択分と『顕揚』成善巧品の2カ所間の類似と対照すると、AS 本事分は多くの「撰」で比較的大きな違いを示す。YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品と AS 本事分との記述の様相の異同を典型的に整理すると、大別3つに分けることができる。

第一に、YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品の定義に対するいわば“付加型”とも呼ぶような違いがある。この型に属する例は、「界撰」「種類撰」「一分撰」および「具分撰」の4つを挙げることができる。たとえば「界撰」²⁰では、「界攝者、謂諸蘊等、自種子所攝」(『顕揚』成善巧品)「(一者)界攝、謂諸蘊等、各自種子所攝」(YBh 撰決択分)と、蘊などが自らの「種子」によって包撰される、としているところを、AS 本事分は以下のように種子＝アーヤ識と明示している：

何等界攝。謂蘊界處所有種子阿頼耶識、能攝彼界。 [AS Ch672c24-25]

khams kyis bsdus pa gang zhe na/ phung po dang khams dang skye mched mams kyi (P: kyis) sa bon kun gzhi mam par shes pa gang yin pa de dag gi khams bsdus pa'o/

[AS Tib D70b1-2, P82b8-83a1. 下線部は同箇所 ASV̄y Tib (下記) との異同箇所]

khams kyis bsdus pa gang/ phung po dang/ khams dang/ skye mched mams kyi sa bon gang/ de mams kun tu len pa'i mam par shes pa'i khams kyis bsdus pa'o/

[ASV̄y Tib D174a4-5, P209a2-3]

dhātusamgrahaḥ katamaḥ/ skandhadhātvyātanānām yad bījam ālayavijñānaṃ sa eṣāṃ dhātusamgrahaḥ/

[和訳：原因〔たるもの〕による包撰〔関係〕とは、どのようなものか。蘊・界・処の種子であるアーヤ識が、それら〔＝蘊・界・処〕を、原因として包撰〔している、という関係〕である²¹] [AS Skt Li (2013) p.244 ll.25-26]

このほか、「種類撰」²²では、「(三)種類攝。謂諸蘊等、遍自種類所攝」(YBh 撰決択分)「種類攝者、謂諸蘊等、遍自種類所攝」(『顕揚』成善巧品)と、包撰される対象たる蘊などが、それ自体と同じ種類のものすべてによって包撰される、と規定する YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品に対して、AS 本事分は、同じ種類であると判断する基準が蘊・界・処の意味

²⁰ YBh 撰決択分：Ch596c1-2; Tib D46b6, P49a8; 『顕揚』成善巧品：Ch547b12; AS Skt p.244 ll.25-26; Ch672c24-25; AS Tib D70b1-2, P82b8-83a1, ASV̄y Tib D174a4-5, P209a2-3; ASBh Skt Tatia (1976) §50 (1) (ii) p.47 ll.7-8; Ch717b14; ASBh Tib D33b1, P42a4-5; ASV̄y Tib D174a5, P209a3-4.

²¹ この解釈は、本「撰」に対する ASBh の以下の注釈を参考にしている：dhātusamgrahaṇa sarvāni skandhadhātvyātanāny ālayavijñānena samgrhitāni sarveṣāṃ tatra bījato 'stivāt/ [ASBh Skt Tatia (1976) §50 (1) (ii), p.47 ll.7-8] [和訳：原因〔たるもの〕による包撰〔関係〕により、アーヤ識によって、蘊・界・処のすべては包撰される〔ということが説かれている〕。〔それら＝蘊・界・処〕すべてが、そこ〔＝アーヤ識〕に於いて種子として存在するからである〕。関連箇所の蔵・漢訳の所在は、ASBh Ch717c25-27; Tib D34a3-4, P43a1-3, ASV̄y Tib D176a1-3, 211a4-6.

²² YBh 撰決択分：Ch596c3-4; Tib D46b6-7, P49b1; 『顕揚』成善巧品：Ch547b13-14; AS Skt Li (2013) p.244 ll.27-28; Ch672c26-27; AS Tib D70b2, P83a1-2, ASV̄y Tib D174a5-6, P209a4-5. ASBh の関連箇所の所在は、Skt Tatia (1976) §50 (1) (iii), p.47 ll.9-11; Ch717b15-19; ASBh Tib D33b1-3, P42a5-7, ASV̄y Tib D174a6-7, P209a5-7.

(語義)にあることを明示的に説明²³している。また、「一分撰」²⁴「具分撰」²⁵では、AS 本事分は、YBh 撰決撰分・『顕揚』成善巧品が全く言及しない教証(であると、ASBh がいう文言)²⁶を、いずれの「撰」でも導入している。

これとは逆に、AS 本事分には、“削減型”と形容できる類の第二の違いもある。この型の異同に分類可能なものは、「相撰」「不相離撰」「更互撰」「方撰」「勝義撰」の5つを挙げることができる。比較しやすい漢訳を用いて、「相撰」を例として以下に示す：

(二者)相攝。謂諸蘊等、自相共相所攝。〔YBh 撰決撰分 Ch596c2-3〕

相攝者、謂諸蘊等、自相共相所攝。〔『顕揚』成善巧品 Ch547b12-13〕

何等相攝。謂蘊界處——自相、即體自攝。〔AS Ch672c23〕

YBh 撰決撰分・『顕揚』成善巧品では、蘊などがそれら自体の個別相と共通相と(「自相共相」)によって包摂されることを、「相撰」と呼んでいる。これに対してAS 本事分は、「共相」

²³ AS の当該箇所は以下のように言う：jāṭisaṃgrahaḥ katamaḥ/ bhinnalakṣaṇāny api skandhadhātāvāyatanāni skandhārtham pramāṇīkṛtya dhātāvāyatanārtham pramāṇīkṛtya sarvāny anyonyam saṃgrhītāni/〔和訳：種類による包摂〔関係〕とは、どのようなものか、たとえ異なった特徴を有するにせよ、蘊・界・処は〔順に〕蘊の意味に基づき、界・処の意味に基づいている〔ので、蘊・界・処の〕すべては相互に包摂されるのである〕。すなわち、YBh 撰決撰分・『顕揚』成善巧品が共通して説く「それ自体の種類(自種類)」を決定するのは、AS によれば、蘊・界・処と名付けられる根拠としてのこれらの語の意味であって、それが共通しているものは同じ種類に属するもの(ASBh がこの箇所注に言う ekajāṭiyatva)として括られる。

²⁴ YBh 撰決撰分：Ch596c9-10; Tib D47a3, P49b4-5; 『顕揚』成善巧品：Ch547b20; AS Skt Li (2013) p.245 ll.1-2; Ch673a7-8; AS Tib D70b6-7, P83a7-b1, ASV̄ Tib D174b8-175a1, P209b8-210a1. ASBh の関連箇所は、Skt Tatia (1976) §50 (1) (viii), p47 ll.18-23; Ch717c4-6; ASBh Tib D33b6-34a1, P42b4-7, ASV̄ Tib D175a1-3, P209b1-4.

²⁵ YBh 撰決撰分：Ch596c8-9; Tib D47a2, P49b4; 『顕揚』成善巧品：Ch547b19-20; AS Skt Li (2013) p.245 ll.3-4; Ch673a7-8; AS Tib D70b7, P83b1-2, ASV̄ Tib D175a3-4, P210a4-5. ASBh の関連箇所は、Skt Tatia (1976) §50 (1) (ix), p47 ll.23-26; Ch717c4-6; ASBh Tib D34a1-3, P42b7-43a1, ASV̄ Tib D175a4-5, P210a5-7.

²⁶ この文言は、梵文では以下のとおり。「一分撰」：yāvanto dharmāḥ skandhadhātāvāyatanaiḥ saṃgrhītāḥ/ teṣāṃ anyatamasamgrahaḥ ekadeśasamgraho veditavyaḥ/〔和訳：蘊・界・処によって包摂される、ある限りの諸法、それら〔諸法〕は〔蘊・界・処の〕いずれかの一部〔のみ〕によって包摂される、というのが、部分による包摂〔関係〕であると知られるべきである〕；「具分撰」：yāvanto dharmāḥ skandhadhātāvāyatanaiḥ saṃgrhītāḥ/ teṣāṃ aśeṣataḥ samgrahaḥ sakalasamgraho veditavyaḥ/〔和訳：全体による包摂〔関係〕とは、どのようなものか、蘊・界・処によって包摂される、ある限りの諸法、それら〔諸法〕を〔蘊・界・処が〕余すところなく包摂するということが、全体による包摂〔関係〕であると知られるべきである〕。

対句のように映るこれらの文言は、AS 本論では陽に教証とされていないが、同箇所に対する ASBh では、次のような表現を用い「別の諸經典において」という文言を付加して、これが教証であることを示している：「一分撰」：evaṃ kṛtvā yāvanto dharmāḥ skandhadhātāvāyatanaiḥ saṃgrhītāḥ sūtrāntareṣu teṣāṃ anyatamasamgraha ekadeśasamgraho veditavyaḥ/；「具分撰」：evaṃ kṛtvā yāvanto dharmāḥ skandhadhātāvāyatanaiḥ saṃgrhītāḥ sūtrāntareṣu teṣāṃ aśeṣataḥ samgrahaḥ sakalasamgraho veditavyaḥ/

なお、ASBh のこの箇所のチベット訳にも sūtrāntareṣu に相当する文言があるが、漢訳には教証であることを示唆する字句はない。また、仮に教証であるとして、出典は未詳。

さらに、ASBh のここでの記述は、五蘊・十八界・十八界とは別種の蘊・界・処を具体例として挙げており、AS 本論のみならず、本稿で扱った他の5カ所の記述に比べて極めて特異といえる。すなわち、「一分撰」では、蘊の例として、いわゆる「無学十法」の分類に用いられる戒・定・慧・解脱・解脱知見の5つの蘊のうちの前3者を、界の例として、「欲〔界における〕恚と害の界 (kāmaṅvāpādahiṃsādhātavaḥ)」を、また処の例として、いわゆる四無色処の「空無辺処など」を、また「具分撰」では、順に「苦蘊」「欲界」「無想有情処」を挙げる。

に言及しないのみならず、「蘊・界・処の各々の個別相たるもののみに基づいて²⁷ (それら〔=蘊・界・処〕が包撰〔される関係〕と見なされるべきである) skandhadhātvyatanāṇaṃ pratyekaṃ yat svalakṣaṇaṃ tair eva (teṣāṃ samgraho draṣṭavyaḥ/)) (AS Skt Li (2013) p.244 ll.23-24) と、「相撰 lakṣaṇasamgraha」つまり特徴に基づく包撰関係は、ひとえに「自相 svalakṣaṇa」のみによると強調している。この相違に関して可能な合理的解釈のひとつとして、AS が「共相」に言及しない理由は「種類撰」とのより明確な差別化を図ったため、と考えることができる。すなわち、先述のとおり、YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品において「種類撰」は、たとえば色蘊は蘊という同じ種類に属する受蘊など他の4つの蘊も含めた五蘊すべてによって包撰されることだと定義される。これに対して「相撰」で言われるように、「自相」と「共相」との両者に基づいて包含関係を規定すれば、これら2つの特徴のうち的一方である「共相」すなわちたとえば蘊が蘊と呼ばれるに足る共通の特徴に基づいた包撰関係と「種類撰」とは、全く同一の関係を意味することになる。AS はこのように (YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品のように定義した場合に) 含意される曖昧さを排除するべく、「共相」に言及せず、「自相」のみを「相撰」の要件とした可能性がある²⁸。

このほか、「不相離撰」(AS 本事分では「伴撰」) および「更互撰」の2つでは、YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品が包撰する主体はそれ自体をも包撰対象として包撰する、としているのに対して、AS 本事分では、包撰される対象自体が包撰主体になることはない²⁹。また、「方撰」³⁰においては、YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品が、或る方角に於いて「転 `jug pa」じている〔蘊・界・処〕、およびその方角に於いて「生 `byung ba」じている〔蘊・界・処〕を、包撰する主体が備える条件として明示するのに対して、AS 本事分ではこれら「転」「生」

²⁷ 「個別相たるもののみに基づいて」と読んで、「個別相たるもののみによって」と解釈していない理由は、ASBh のこの箇所への注による：lakṣaṇasamgrahaṇa rūpaskandho rūpaskandhenaiva samgrhīto vistareṇa yāvad dharmāyatanaṃ dharmāyatanaenaiva/ (和訳：特徴に基づく包撰〔関係〕により、色蘊は色蘊のみにより包撰される、乃至、法処は法処のみにより包撰される〔ということが説かれている])。

これによれば、「相撰」における包撰する主体・包撰される対象はいずれも同じものとなり、「自相」が包撰主体として包撰対象を直接的に包撰するとはしていない。

²⁸ 但し、YBh 撰決択分・『顕揚』成善巧品がいう「自相共相所攝」が、たとえば色蘊がもつ「自相」すなわち色としての個別相と、「共相」すなわち蘊としての共通相との2つの論理和を指すと解釈すれば、ASBh (Skt Tatia (1976) §50 (1) (i), p.47 ll.6-7; Ch717b11-12; ASBh Tib D33a7-b1, P42a3-4, ASVy Tib D174a4, P209a2) がいう「如色蘊攝色蘊、乃至法處攝法處」という結果になり、ここで述べた曖昧さは回避される。

²⁹ AS Skt Li (2013) p.244 ll.31-32) : saḥāyasamgrahaḥ katamaḥ/ rūpaskandhas tadanyaīḥ skandhaiḥ saḥāyaiḥ saparivārah saḥāyasamgrahena samgrhītaḥ/ (和訳：助伴 (saḥāya) による包撰〔関係〕とは、どのようなものか。色蘊は、それ〔=色蘊〕以外の助伴である諸蘊によって、取り巻くものを伴ったもの (saparivāra, Tib: `khor dang bcas pa) として、助伴による包撰関係として包撰される)。この箇所の漢訳 (Ch673a1-2) では明確ではないように読めるが、チベット訳 (AS Tib D70b4-5, P83a4-5, ASVy Tib D174b3-4, P209b3-4) も、包撰対象に包撰主体を含まないという解釈を支持する。但し、これに注した ASBh (Skt Tatia (1976) §50 (1) (v), p.47 ll.15-19, Tib D33b4-6, P42b1-3, ASVy Tib D174b4-5, P209b4-6) は、saḥāyasamgrahaṇa rūpaskandhaḥ saḥa tadāśritair vedanādibhiḥ saḥāyair grhyamāṇaḥ pañcabhiḥ skandhaiḥ samgrhītaḥ/ (和訳：助伴 (saḥāya) による包撰〔関係〕により、色蘊は、それに依拠している受などの他の助伴と共にまとめられて (grhyamāna, Tib: ... grogs mams dang lhan cig tu), 5つの蘊によって包撰される〔ということが説かれている]) と述べており、AS 本論の記述とは相違して、包撰主体が包撰主体それ自体を包撰することを許容している。

³⁰ YBh 撰決択分：Ch596c7-8; Tib D47a2, P49b3-4; 『顕揚』成善巧品：Ch547b17-19; AS Skt Li (2013) p.244 ll.33-34; Ch673a3-4; AS Tib D70b6-7, P83a5-6, ASVy Tib D174b5-6, P209b6-7. ASBh は、「方撰」には付注していない。

への言及はない。さらに、「勝義撰」³¹では、*YBh* 撰決択分・『顕揚』成善巧品が「真如相 de *bzhin nyid kyi mtshan nyid*」と真如の特徴への言及を含むのに対して、*AS* 本事分には「相」への言及はみられない。

このように整理すれば、*YBh* 撰決択分・『顕揚』成善巧品の記述とほぼ共通する *AS* の定義は、「分位撰」³²と「時撰」³³の2種のみとなる³⁴。

「分位撰」では、*YBh* 撰決択分・『顕揚』成善巧品が、包撰の基準である「分位」(状態)の例として「順楽受」を挙げるのに対して、*AS* 本事分は「楽(位)」「苦(位)」「不苦不楽(位)」を例示する点で用語は異なるものの、そうした状態にある蘊などが、同じ状態にある蘊などによってのみ包含されるとする点で同じである。また「時撰」については、過去・未来・現在の時間にある蘊などは、「分位撰」の場合と同様に)同じ時間の蘊などによってのみ包含されるとする点で、全同である。

III-4-3 『雑集』決択分

最後に、*YBh* 撰決択分・『顕揚』成善巧品、および *AS* 本事分(および同所に対する *ASBh*)を両極として、これら2つのグループの記述と『雑集』決択分のそれとを対照した場合には、『雑集』決択分はより後者に近いと言える。すなわち、全11種から、II-4-2で述べたとおり『雑集』決択分を除いた4カ所でほぼ共通する「分位撰」「時撰」を除いた9種のうち、*YBh* 撰決択分・『顕揚』成善巧品に近いものは「界撰」³⁵「更互撰」³⁶の2つで、他はいずれも *AS*

³¹ *YBh* 撰決択分: Ch596c10-11; Tib D47a3, P49b5; 『顕揚』成善巧品: Ch547b20-21; *AS* Skt Li (2013) p.245 l.29; Ch673a26; *AS* Tib D71b4, P84a8-b1, *ASVy* Tib D176a3, P211a6. *ASBh* は、「勝義撰」にも注を加えていない。

³² *YBh* 撰決択分: Ch596c4-5; Tib D46b7, P49b1-2; 『顕揚』成善巧品: Ch547b14-15; *AS* Skt Li (2013) p.244 ll.29-30; Ch672c28-29; *AS* Tib D70b2-3, P83a2-3, *ASVy* Tib D174a7-b1, P209a7-8. *ASBh* の関連箇所所在は、*Skt* Tatia (1976) §50 (1) (iv), p47 ll.11-14; Ch717b21-24; *ASBh* Tib D33b3-4, P42a7-b1, *ASVy* Tib D174b1-3, P209a8-b3.

³³ *YBh* 撰決択分: Ch596c6-7; Tib D47a1-2, P49b2-3; 『顕揚』成善巧品: Ch547b16-17; *AS* Skt Li (2013) p.244 ll.35-36; Ch673a5-6; *AS* Tib D70b5-6, P83a6-7, *ASVy* Tib D174b6-7, P209b7-8. *ASBh* は、「時撰」には付注していない。

³⁴ なお、*AS* と *ASBh* との間にも、「一分撰」「具分撰」に関して注26末尾で述べたような違いがみられる。

³⁵ 『雑集』決択分 Ch 770a25-26: 「界攝者、謂諸界種子。由此能攝種所生法」。この定義は、原因としての種子に「種子から生み出される法(「種所生法」)＝蘊・界・処という表現によって言及する一方で、陽にアーラヤ識には言及しないという点で、『顕揚』成善巧品・*YBh* 撰決択分に類似する。

但し、定義の前半「謂諸界種子」の解釈には、若干の問題がある。『国訳』(p.313)はこれを「界の撰とは、謂く諸の界の種子なり」と読んでいる。『国訳』のように解釈した場合、たとえば *AS* 本事分のように「諸蘊界処」の種子、あるいは『顕揚』成善巧品・*YBh* 撰決択分のように「諸蘊等」の種子とせず、ここで「諸界」の種子と、ことさらに界を挙げている意図または理由については、未詳。あるいはここでの「界」は、『顕揚』成善巧品・*YBh* 撰決択分・*AS* 本事分と同様に、原因を意味し、*dhātu*＝種子として「界〔＝原因〕〔である〕種子」と解釈すべきか。しかしその場合にも、事実上アーラヤ識を指すと解釈できるこの「界種子」が(たとえば「諸蘊等種子」あるいは「諸蘊界処種子」などとしてではなく)「諸界種子」と明示的に複数化されることの合理的な説明は困難と思われる。

³⁶ 『雑集』決択分 Ch770b4-5: 「更互攝者、謂蘊界處更互相攝」〔和訳: 更互撰とは、蘊・界・処が相互に包摂することである〕。包摂する主体を網羅的に「蘊・界・処」としている点では、『顕揚』成善巧品での「蘊等」に比べて明確かつ画定的であるが、定義の後半「更互相攝」は同じ。

本事分に近い。但し、『雑集』決択分に独自とみなしうる定義が、「種類撰」に関して与えられている³⁷：

(三) 種類攝。謂諸蘊等、遍自種類所攝。〔*YBh* 撰決択分 Ch596c3-4〕

種類攝者、謂諸蘊等、遍自種類所攝。〔『顕揚』成善巧品 Ch547b13-14〕

何等種類攝。謂蘊界處其相雖異、蘊義界義處義等故、展轉相攝。〔*AS* Ch672c26-27〕

種類攝者、謂約色種類有十色處、色蘊所攝。如是等。〔『雑集』決択分 Ch770a27-28〕

ここで『雑集』決択分が示す「種類撰」の例は、「色の種類をまとめれば 10〔種あるが、それら 10 種類の色＝〕色処が、色蘊により包摂される」³⁸というもので、色蘊と、色処〔物質としての色の特徴を備えた、色・声・香・味・触と眼・耳・鼻・舌・身との 10 の処〕³⁹との間の関係が示されている。これは、この「撰」に関して、蘊という「種類」に属する色蘊が、処という別の「種類」に属するものを包摂するという定義を、『雑集』決択分が与えているものと解釈できる。これに対して、*YBh* 撰決択分・『顕揚』成善巧品と *AS* 本事分とにおいては、いずれの箇所でも、蘊・界・処がそれぞれ（同じ蘊・界・処という「種類」に属するが、蘊・界・処という種類のうちのさらなる細分類としては別種という意味で）異なる蘊・界・処を包摂する、と定義している。

IV 結論

以上を通じて、*YBh*・『顕揚』・*AS*（および『雑集』）の 3 文献では、「撰」に関する言及が置かれた文脈がテキストごとに異なるものの、共通する 11 種の「撰」が説かれていること、各「撰」の定義内容の点では、*YBh* 撰決択分と『顕揚』成善巧品とのあいだに高い親近性が看取できる一方で、これら 2 文献に対して *AS* 本事分の記述には独自性が顕著であること、以上 2 点を明らかにした。

これら 2 点は、3 文献 6 カ所の（1 つの）共通点と（2 つの）相違点と言い換えることができる。問題は、本稿で明らかにした共通点・相違点を、文献史および思想史の観点から、どのように意義付け、解釈することが可能か、という点である。

共通点、すなわち実質的に同じ 11 種「撰」が説かれていることは、これら 3 文献の成立時期までに、初期瑜伽行派において、「撰」の数と各々の定義とに関する原型とも言うべき

³⁷ *ASBh* (Skt Tatia (1976) §50 (1) (iii), p.47 ll.9-11; Ch717b15-19; *ASBh* Tib D33b1-3, P42a5-7, *ASV*Tib D174a6-7, P209a5-7) は、この「種類撰」については、蘊・界・処の語義の説明に終始しているため、省略。

³⁸ 『国訳』(p.313) の読みは、「謂く色の種類に約して十色處有れども、色蘊の所攝なりと。是くの如き等なり」。

³⁹ 「十色処」については、*AS* 三法品の第 5 論題「蘊界処の定義」のうち、処に関する記述 (*AS* Ch666b11; Tib D54b1-2, P63a2-3, および *ASV* Ch702c19-20; Tib D137b7, P167a8-b1) による。漢訳のみ示す：「云何建立処。謂十色界即十色処」。ここでいう「十色界」は、その直前の界の定義 (*AS* Ch666a16-18; Tib D53b4-6, P62a2-5, および *ASV* Ch702a23-24; Tib D136a4-6, P165b1-3) を受けている。同じく漢訳のみを示す：「云何建立界。謂色蘊即十界。眼界色界、耳界声界、鼻界香界、舌界味界、身界触界、(及意界一分。受蘊想蘊行蘊即法界一分。識蘊即七識界。謂眼等六識界及意界)」。なお、この界の定義で *AS* 本論にある「意界一分」は、大正蔵に異読の注はないが、*AS* チベット訳および『雑集』の対応する本論相当箇所 (*ASV* Ch702a24) では「法界一分 chos kyi kham kyi phyogs gcig」。

理解⁴⁰が確立されていたことを強く示唆する。原型が確立されていたがゆえに、同一の11種「撰」が、各文献・各箇所そこに固有の文脈に即して置かれることを可能にした。

その半面、相違点のひとつ、つまり「撰」言及の文脈と排列順が各文献・各箇所に固有であって異なっていることの解釈は、もうひとつの相違点である、*YBh*・『顕揚』に対する *AS* の独自性の意義付けと相俟って、難しい。これら2つの相違点には、二様の解釈が可能であろう。ひとつの解釈は、相違は各文献成立の時系列とは無関係あるいは独立に、単に異なった著作意図の反映であるとするもので、もうひとつの解釈は、相違が時間の経過を伴う（総体としての学派、あるいはその学派に属する著者の）思想の変化（そして文献史の観点からは、文献の先後関係）を示す痕跡であるとするものである。本稿 III-4-2⁴¹でみた「界撰」を例としよう。同「撰」でのアーヤ識への言及の有無は、先行して成立し、そこで蘊・界・処の原因たる種子に言及していた *YBh*・『顕揚』の定義に、*AS* が後から種子＝アーヤ識と付加的に明示したのだろうか。あるいは *AS* には *YBh* や『顕揚』とは異なる執筆意図があったために、*YBh*・『顕揚』の当該「撰」の規定には現れない（文献成立の先後にかかわらず）アーヤ識が *AS* では言及されたのだろうか。また、同じく III-4-2 で「相撰」（と「種類撰」との差別化）に関して検討した、「自相」のみ（*AS*）「自相共相」（*YBh*・『顕揚』）という要件の相違は、そこで示唆したように、*AS* に先行して成立していた *YBh*・『顕揚』の記述内容を批判的に継承して改善した、と断定できるだろうか。

本稿で指摘した2つの相違点の解釈の困難は、つまるところ、本稿が扱った「撰」に関する記述の考察結果からは、これら二つの解釈のどちらか一方だと判別するに足る、決定的な、あるいは十分な材料を得られなかったことに起因する。

以上のように嚴重な留保をつけたうえで、*YBh*・『顕揚』・*AS* の3文献の文献史について本稿 II および III で示した比較対照の結果が導く蓋然性の高い仮説は、*YBh*・『顕揚』2文献の *AS* に対する先在性であると考えたい。本稿で検討した「撰」に関して、『顕揚』が *YBh* を事実上祖述しているという意味で、両者の間には極めて高い近似性がみられた。それに対して *AS* で説かれた「撰」は、*YBh*（およびそれを継承する『顕揚』）の記述内容、ひいては上述

⁴⁰ *AS* は、「撰」に関する一連の解説を終えた後、これら11種「撰」に通暁することの利益を規定して、「所縁を集約〔して理解する〕 *ālabanābhisamkṣepa*」という利益、および「（その結果として）所縁を集約〔して理解する〕につれて、善根が増大する〔という利益〕」を挙げている〔*AS Skt Li* (2013) p.245 ll.31-32; Ch673a26-28; *AS Tib* D71b4-5, P84b1-2, *AS Vy Tib* D176b1-3, P211a6. *ASBh* には言及なし〕。「撰」に通暁することで得られる利益とは、換言すれば「撰」を記述する目的であり、またこれら11種「撰」を総括する視点でもあろう。

また、*ASBh* は、*AS* 本論上掲箇所の近傍でより端的に、「撰」の特徴を「世間一般に通用している包撰〔関係の在り方〕に従って *lokaprasiddhasamgrahānusāreṇa*」6種の観点から別説として説いている。そのうち第6の観点として、上掲の *AS* と同じ「集約 *abhisamkṣepa*」という表現を用いて、*AS* 本論で説かれた11種「撰」は、この「集約としての包撰〔関係〕 (*abhisamkṣepasamgraha*) を主題として〔説かれたもの〕として知られるべき」と注している〔*ASBh Skt Tatia* (1976) §50 (2)-(vi), p.47; Ch718a10-13; *ASBh Tib* D34b1, P43a8-b1, *AS Vy Tib* D176a7-b1, P211b4-5〕。

これらは、本稿でとりあげた「界撰」から「更互撰」までの11種「撰」を一括する、いわばメタ・レベルの視点からの規定であると解釈できる。

⁴¹ そもそも、本稿同節で異同の類型化に際して用いた「付加型」「削減型」という分け方自体が、（比較の基準を *YBh*・『顕揚』に置いたために、その限りでは必然ではあるもの）*AS* に対する *YBh*・『顕揚』の先在性を暗黙裡に含意している。

で指摘したような, *YBh* 成立までに初期瑜伽行派において確立されていたと推定される 11 種「撰」の“原型”からの乖離を示している。このことは、先行して成立していた *YBh*・『顕揚』を参照したうえで、アサンガが、*AS* の著述に際してその内容（あるいは“原型”の細部）を改変したことを示すと解釈するのが、最も妥当であろう。但しこれはあくまでも作業仮説であって、今後ともこれら 3 文献にみられる数多くの共通の論題、教義概念に関する記述の精査を積み重ねる必要があることは再言するまでもない。

〈略号および使用テキスト〉

- AS* 本事分 *Abhidharmasamuccaya* 『大乘阿毘達磨集論』本事分撰品：梵文（以下, Skt）Li Xuezhū [李 学竹] “Diplomatic Trascription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* — Folios 1, 15, 18, 20, 23, 24 —,” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, Vol. XVI pp.241–253, 2013 所収, Folio 15 (pp.244–245)（以下, Li (2013)）；大正蔵（以下 Ch）(Vol.31) No.1605, 672c2–673a28；チベット訳（以下 Tib）デルゲ版（D）(Sems tsam Vol.12) No 4049, Ri 70a6–72b5, 北京版（P）(Vol.112) No.5550, Ri 82b5–84b2。
- 他に、梵文テキストについては、阿毘達磨集論研究会「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)」『インド学チベット学研究』19, pp.58–96, インド哲学研究会, 2015 (阿毘達磨集論研究会 (2015); Gokhale, V. V. “Fragments from the *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga,” *Journal of the Royal Asiatic Society, Bombay Branch, New Series* 23 (1947) pp.13–38 (Gokhale (1947)) をも、必要に応じて参照した。
- ASBh* *Abhidharmasamuccayabhāṣya* : Skt Tatia, Nathmal *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series No.17, Patna, 1976, pp.46–47 (§50 (1)–§50 (2)（以下, Tatia (1976)）；Tib D (Sems tsam Vol.13) No.4053, Li 33a7–34b1, P (Vol.113) No.5554, Shi 42a4–44a1。
- ASVy* 『大乘阿毘達磨雜集論』(*Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* (*ASVy*), *AS* 本論と *ASBh* の会本形式) : Ch (Vol.31) No.1606, 717b8–718a15; Tib D (Sems tsam Vol.13) No.4054, Li 174a2–176b2, P (Vol.113) No.5555, Shi 208b7–211b6。
- YBh* 本地分 *Yogācārabhūmi* 『瑜伽師地論』本地分聞所成地 : Ch (Vol.30) No.1579, 346b27–c2; Tib D (Sems tsam Vol.5) No.4035, Tshi 164b2–b4, P (Vol.109) No.5536 Dzi 164b2–b4。
- YBh* 撰決撰分 *Yogācārabhūmi* 『瑜伽師地論』撰決撰分五識身相応地意地 : Ch (Vol.30) No.1579, 596b16–c13; Tib D (Sems tsam Vol.8) No.4038, Zhi 46b5–47a5; P (Vol.110) No.5539, Zi 46b5–47s5。
- 『顕揚』撰事品 Ch (Vol.31) No.1602, 501b5–8。
- 『顕揚』成善巧品 Ch (Vol.31) No.1602, 547b11–22。
- 『雜集』決撰分 『大乘阿毘達磨雜集論』決撰分論品 : Ch (Vol.31) No.1606, 768c29–769a2, 770a25–770b6。

大正蔵 『大正新脩大蔵経』
 デルゲ版 『デルゲ版チベット大蔵経』 論疏部 唯識部
 北京版 『影印北京版西藏大蔵経』

(参考文献)

Schmithausen (1987) Schmithausen, Lambert, *Ālayavijñāna*, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1987.

『国訳』 常盤大定・結城令聞共訳、勝又俊教・向井隆健校訂『国訳一切経』 瑜伽部 10 『大乘阿毘達磨雜集論』 改訂 3 刷、大東出版社、1987.

早島理・毛利俊英 (1990) 「『顕揚聖教論』の科文」『長崎大学教育学部社会科学論叢』 第 40 号、pp.51-88, 1990.

「撰(samgraha)」対照表

	YBh 本地分 開所成地	YBh 撰決撰分 五識身相応地意地	『顕揚』 撰事品	『顕揚』 成善巧品	AS 本事分 撰品	『雑集』 撰決撰分 論品
		(更互(相当)) 11	更互 11			
	界 1	界 1	界 1	界 1	相 2	界 1
	相 2	相 2	相 2	相 2	界 1	相 2
	種類 3	種類 3	種類 3	種類 3	種類 3	種類 3
	分位 4	分位 4	分位 4	分位 4	分位 4	分位 4
	不相離 5	不相離 5	不相離 5	不相離 5	伴 5	助伴 5
	時 6	時 6	時 6	時 6	方 7	時 6
	方 7	方 7	方 7	方 7	時 6	方 7
	一分 8	全 9	一分 8	全 9	一分 8	具分 9
	具分 9	少分 8	全分 9	一分 8	具分 9	一分 8
	勝義 10	勝義 10	勝義 10	勝義 10	更互 11	更互 11
	蘊 界 處 縁起 處非處 根			更互 11	勝義 10	勝義 10
排列順 の逆転	上記を仮に基準とする (上記「蘊」-「根」 の6種を「更互」相当 として括る)	・「全分」→「少分」 ・「界」以下10種類の 前に「更互」(相 当)	・「界」以下10種類の 前に「更互」	・「全」→「一分」	・「相」→「界」 ・「方」→「時」 ・「更互」→「勝義」	・「具分」→「一分」 ・「更互」→「勝義」
備考	名称列挙のみ (この箇所の前後は 『顕揚』撰事品と ほぼパラレル)	「更互」相当箇所 では、蘊・界・処に加 えて、有支(十二支縁 起の支分)・処非処・ 根に言及	名称列挙のみ (この箇所の前後は YBh 本地分と ほぼパラレル)			

表注(1) 上掲表では、各「撰」を「撰」字を省いたうえで漢訳訳語により示している。

(2) 各列の右側数字は、各テキストの当該箇所での排列順を示す。

(3) 数字が斜体で薄く網掛けされた項目は、その排列順が、本表で最左列に置いて
仮に基準としたYBh 本地分とは逆転していることを示す。

(4) 数字が斜体で濃く網掛けされた項目は、排列順の逆転のみならず、記述の
位置が離れていることを示す。

〈Keywords〉 『瑜伽師地論』、『顕揚聖教論』、『阿毘達磨集論』、初期瑜伽行派、samgraha、
撰, bsdus pa

おかだ しげほ 気象庁気象大学校准教授

Samgraha (撰, *bsdus pa*) in the three early Yogācāra texts:
the *Yogācārabhūmi*, the *Xianyang shengjiao lun* (顯揚聖教論)
and the *Abhidharmasamuccaya*

OKADA, Shigeho

In the three early Yogācāra texts, viz, the *Yogācārabhūmi* (*YBh*), the *Xianyang shengjiao lun* (顯揚聖教論) and the *Abhidharmasamuccaya* (*AS*), there exist numerous passages where a certain same concept/term is discussed and the description thereof are quite similar or identical almost to the letter to each other. Traditionally these passages are treated as sources of abhidharmic definitions, in a more or less parallel way, with little consideration as to the precise similarities/differences of these definitions, the possible reasons thereof, if any, that are intrinsic and particular to the context of each text as well as in contrast among the three. Examining the mode of similarities/differences found in the relevant passages in these texts hopefully contributes to elucidating the role(s) which Asaṅga played in the formation of the three texts.

As an attempt at this, this paper examines the definitions of *saṃgraha*, a set of classification criteria of *dharma*, found in all of the three texts (two passages each): *Śrutimayī Bhūmi* (listing only) and *Viniścayasamgrahaṇī* sections of the *YBh*; Chapters I (撰事品, also listing only) and III (成善巧品) of the *Xianyang lun*; Chapter I section 10 (the *Samgraha* in the *Lakṣaṇasamuccaya*) of the *AS* and Chapter V (*Sāṃkathyavinīścaya*) of the *AS-Vyākhyā* (found only in the Chinese translation). Analysis of the texts' formal aspects such as the number of *saṃgraha* (10, 11 and 16), their listing order and the terms used to designate each of them, as well as examination of the content of their definitions in these passages reveals that an identical set of the same eleven *saṃgraha* are described in all of these passages, while their contextual positioning differs from passage to passage. Salient similarities/differences found in the actual definitions of the eleven *saṃgraha* are noted and discussed, which consequently indicates that while the *YBh* and the *Xianyang lun* are virtually identical, the *AS* shows a notable deviation from those two texts in that the *AS* either adds to (as in the case of *dhātu-saṃgraha* and three others) or subtracts from (as in five *saṃgraha* including *lakṣaṇa-saṃgraha*) the definitions in the *YBh* and the *Xianyang lun*.

These findings strongly suggest that by the time these three texts were formed, a prototypical set of definitions of the eleven *saṃgraha* had been well-established in the Yogācāra school; the individual descriptions given in these three texts were based on this prototype, with contextual placement of the passages describing *saṃgraha* more or less freely arranged according to what the theoretical/logical flow of each text dictates. As to the interpretation of the significance of the deviation of the *AS* from the *YBh* and the *Xianyang lun*, the present author finds it most probable that both the *YBh* and the *Xianyang lun* precedes the *AS*; Asaṅga wrote, with the well-established prototype in mind, the *saṃgraha* section of the *AS* by referring to and modifying the definitions in the *YBh* and the *Xianyang lun*.